

私達がつくつていく場所

——「十六歳からの発信」を開く——

小山 秀 樹

一 はじめに、あるいは「地つづき」の意識はどのようにつくられたか

まず自身の国語の授業を振り返ることから始めてみたい。私は教師になってまもなく、生徒の活動を中心にした授業を試み始めた。その頃の私は、講義の形の授業では十分に生徒の力を引き出せていなかったように思う。主体的に、また相互に学習していくことは、生徒の学習に対する意欲を高める。私はグループ発表の授業を何とか自分のものにしたと考えた。現代文では「こころ」「羅生門」を、古典では「万葉集」「古今集」「新古今集」を教材にし、実践のなかで方法を改善していった。私の授業に対する取り組みは、授業の方法に対する問題意識が先行したと言えるかもしれない。しかし授業を進めるうちに、それらの授業では生徒の日常の生活のありようもあらわれることになったのである。グループでの準備の学習に班員が集まらない。班学習が担当範囲の分担で終わってしまう。班のテ

スト問題が事前に流れる。それらは、生徒達が日常に抱えている問題である。またそれらは「私」の、「私達」の問題でもある。固有な状況を抱えた私達が固有でない問題にあたる。それは現代の問題である。私は、これらの問題を授業の側からとらえなおすことを目標にしたいと考え始めた。方法に関しての問題意識が、国語の授業の目標を私に要求していったと言えるかもしれない。日常の中に課題を見いだし、国語の授業として生徒達と考えていく。日常の課題が授業の課題となり、授業の課題が日常の課題となっていく。授業と日常が壁のない「地つづき」の地平となって課題が生徒達に意識され、ことばの力によってその課題に立ち向かっていけるような、そんな授業をしたいと私は考え始めたのである。

二 「十六歳からの発信」の授業

a 「十六歳からの発信」という課題意識

五年ぶりに一年を担当することになり、生徒に考える習慣をつけさせたいと思った。十代後半は、言葉で物事をとらえ、状況をつかみ、変えていく力を養う時期であるように私には感じられる。またそれは、高校現代文の授業としても、十分目標になると思われる。そう考えて一年生にのぞんでいった私の授業の実際は、問題の核心に迫ることのできない時間の連続だったように思う。説明をし、考えさせる。個人でまとめさせ、グループでも話し合わせる。しかし、個人の考えがどれほど深まり、またそれが授業として実感できていったかは疑問であった。それは、私が彼らの日常について十分想像力を持っていなかったことに原因があるように思われる。思いつくままに問題点としてあげると次のようになる。

a 彼らの日常の大部分が消費されることばの連続であることを十分意識できていなかった。

b 日常に考え、生活する「場」がない。

c 感じ、考えていく力は見た目以上に個人差があり、授業全体の実感を難しくしている。

a は、私が特に驚いて受けとめたことである。友人との会話においてさえ、携帯での会話やメールのやりとりと近いものがあるようにさえ思う。それらは、断片であり、用例に近い。「そうなんだ……」「それで？」これらはメールのことばで、本来的には話し言葉になりにくいはずのものである。彼らが普通にこのように会話しているのを耳にすると、中に割って入りたくもなるのである。それは、自分ごとばで考え、またことばに考えさせられる生活を危うくするものである。もっと言えば、考えることを中断して初めて用例を

使った会話は成立する。このことは必然として、国語の授業が感じ、考える学習だということの意識づけをむずかしくしたように思われる。「国語ってなににする勉強なん？」私の授業にとまどい、こう発言した生徒に答えたり対峙したりしたが、結果から見れば不十分だったように思う。a の傾向は、b をさらに強めている。大阪府下全域から学区に関係なく集まり、この学校で学習する。HR が友人友人もいるが、生活し、日常に生きる場としてはあまりにも弱い。しっかりした会話が成立しにくいところに生活する「場」が生まれるはずもない。あるように感じているのは仮構の、自分が期待する自分だけの居所であって、「場」と呼べるはずもなく、複数の人間がいっしょになって壊し、つくっていく共同の「場」ではない。形にはなっていないが、十代後半の彼らの生活の中で共同の「場」を求める気持ちがないはずはない。授業の中で、少しずつ聞いていく。日常に確かな「場」をつくることに、少しでも授業は役立つことが果たしてできるだろうか。

三学期を迎え、私は彼らに授業の多くの部分をまかせてしまおうと考えた。グループで考えさせ、その深まった点を実際に語らせようと考えた。問題点はなお残り、解決されないかもしれない。また、見えなかつた問題がさらに浮かび上がったたりもするだろう。しかし、問題点を感じさせることはできる。「場」をつくる方向に進もう。彼らの声を多く聞こう。私は、「私達が帰っていく場所」「私達が立っている場所」という、生徒の日常に課題を見だし、それについて考えていく授業を展開していた。今は課題を感じさせるだけになるかもしれない。できればたった一つでも消費されることばではなく、

長く記憶にとどめることばを授業の中で獲得し、そのことばを力にして日常を生きてほしい。そんなことばは混乱の中から生まれるのでは、という期待も持ちながら私はグループ発表に向かったのである。

b 授業の構想

宮本輝「途中下車」、鷗沢蒾「卒業」、中上健次「断層」の三つの小説を用意し、五人のグループを八つ作らせた。ひとつの小説について二グループが担当し、その読みをみんなに発表させた。指導計画は以下の通りである。

学 習 内 容		使用する主な教材	配当時間
1	全体構想 班分け 担当部分の決定		1
2	班ごとの学習(問題点の設定 班討議) 班指導	「卒業」(鷗沢蒾)	2
3	班作成確認テスト「卒業」発表 補充発表	「途中下車」(宮本輝)	2
4	班作成確認テスト「途中下車」発表 補充発表	「断層」(中上健次)	2
5	班作成確認テスト「断層」発表 補充発表		2
6	「？」班の発表	鷗沢蒾 宮本輝 中上健次 次の作品から選ぶ。	2
7	発表を終えて	扱った全作品	1

三つの小説は、いずれも十八歳が主人公である。生徒達は作品の世界に入り、深く考え、話し合っていくためには彼らより少しだけ上の年齢がよいと考えたためである。授業はおよそ次のような組み立てとなる。

1	班による作品への取り組み	どんなことを読みとったか。何を中心に据えたか。
2	発表資料の作成	B 4用紙一枚が基本(資料①)
3	Q & A	班に対し、発表資料に書かれてある事柄について質問、指導
4	本発表(約三十五分)	発表班以外の人は、感想用紙に記入、班に提出(資料②)
5	補充発表(約十分)	感想用紙をもとにさらに話し合い、発表資料一枚を作成(資料③)
6	提出してもらった用紙の質問に答え、意見を書き、個人に返却	

話し合いが十分なされているかはQ & Aと称し、授業の一週間ほど前に班員全員を集め、点検していた。私が常に意識したのは、生徒は言葉に追いついたか、あるいは言葉を生み出したか、である。作品を読み、問題点を出し合うことによって生徒達は表現されている言葉に追いつく。あるいは、自分たちの班の読みがよく表現される言葉を生み出す。私は生徒達が表現に追いつくよう、また自分たちの言葉を生み出していきけるよう、小さな機会をも逃さずにアシストしようとした。いったん自分のものになった言葉は授業の壁を破って日常に、現実に向き合う言葉となっていくという確信が、私に生徒を誉めさせましたし、対峙させましたように思う。

以下に授業展開の実際例(第六時)をあげる。

目標

- ① 表現から「私」の心理を読みとり、実感させる。
- ② グループで話し合った内容を、みんなに伝える力をつける。
- ③ 班の発表を聴き、自分の読みと比べさせる。

段階	学習活動	指導上の留意点
導入 (五分)	* 前時までの学習経過と本時の予定の説明	
展開 (四十分)	* テスト担当班作成の確認テストを実施 * 「空室」補充担当班の発表 * 「途中下車」担当班の発表	* テスト問題は適切か。 * 前回の発表から、みんなの意見をふまえてどんな変化が見られるか。 * よく話し合われているか。独断性はあるか。 * 「私」の心理がよく読みとられているか。 * 「私」発表内容について
	* テスト担当班、補充担当班、担当班の発表についての助言	* 「私」発表の方法について
整理 (五分)	* 次時の予告	* 発表感想表の記入に使うこともある。

c 授業の実際

i 生徒はどのように学習してきたか

生徒はどのように学習を進めたか。その文章からあとをたどっていきたいと思う。

a はじめ先生からグループで学習して授業をすると言われたときは、自分にそんなことができるか不安だった。実際、グループに分かれて話し合いを始めたときは、教科書ばかりを読むだけで、何をどう進めていったらいいのかわからないまま二・三時間過ごしていたと思います。とりあえず文章のあらすじを考えてみても、先生に「違う」と言われる度に班のメンバー全員で悩み込んでしまい、時にはやる気さえ出ない日がありました。

b 私たちの発表は一番手。何をどうしたらよいかわからなく時間だけが過ぎていく。私は班長で毎日班員に「今日残って考えよ。」と呼びかけ続けました。でも班員全員が予定を合わせるのは難しく、二・三人残れても放課後のトークタイムとなるだけでした。

c 正直言って、自分達で授業をする、ということを告げられた時は驚い

た。「時間?…長いやん!という感じでした。でも、同時に、面倒くさいけど、面白そうやなと思いました。私達の班は、スタートがすごく遅かったです。(まるで三組をそのまま表したような…)そのため、残り一週間はすごく忙しかったです。

生徒は何とか話し合いを成立させようとよく努力した。私は話し合いをアシストしていくために、生徒の持ってきた資料のいい点を見つけたら、厳しく突き返したりしていった。

d 話し合いの初めの方は遠慮してぜんぜん進まなかった。でも自然にみんな意見を言うようになっていった。意見を言うというかつい熱が入ってケンカみたいになってたけど。私はたいがい、みんなと違う意見を言っていたしかも私は頑固なので、すごいバトルしてた。おまえら声でかすぎやろっていうくらい。すごく楽しかったけどさすがに休みの日に学校きて、朝9時から夕方5時までやった時は頭がおかしくなりそうだった。ちょっと進んではやり直しというのの繰り返し。でもそのおかげで最終的には自分たちの満足いく発表ができたんだと思う。

e なんとか必死に期限に間に合うよう原稿を完成させました。そして結果はやり直し。本当にノイローゼになるくらいつらかったしびっくりました。でも今から思うとそれはチャンスだったんじゃないかなとおもいます。休日の日も学校で議論しました。班員が考えていることはそれぞれ異なったので、全員が納得し、それを一つの文章にするという作業がとても大変でした。最初ははつきり言っても協力してくれませんでした。放課後残る回数が増すとともにバラバラだった班が一つになるのを感じました。最後には全員がしっかりと意思を言え、全員で原稿の構成を考え、新しい原稿が出来ました。

f ても、そうしているうちに先生の助言もあって、「嘘」というテーマに注目して話を進めていこうと決まるとどの文章も何かを伝えようとしているようで色々な考えが頭の間に浮かんできました。そうすると班の全員が自分の考えや意見を口に出せるようになってきてどんどん内容がまとまっていきました。時々、意見がくい違ったりすることもありました。こうしていくうちにどんどん時間だけがなくなっていくって最後の方には、放課後遅くまで残らなければいけなかったりもしたけど、結果的に良いレポートができたとおもいます。

g 「回目のQ&Aはテーマがないためやり直し、やり直し、やり直し……結局出来上がったのは本番当日の昼休みでした。しかし、忙しかった分、充実していました。自分の意見を皆にぶつけ、とり入れ、皆で理解を深める……一つ一つの言葉を「これはこういう意味じゃない?」「何でこう思ったのか理論付けしないと……」と、そうやって少しずつプリントが出来ていく喜び、理解が深まる喜び!そして今まであんまり関わりのなかった子と仲良くなれた一体感を味わえた気がします。そして、班員の色々な面を見れて、知ることができました。本番も自分達が考えたことは、全て言えたと思います。それは「皆で考えた」からだと思っています。

同じクラスの友人から出される言葉の一つ一つを生徒は感じとっていき、彼らにとつて予想だにしなかった場を話し合いは生み出していったように思う。本発表以降にも生徒はそれを感じるようになる。

h 発表が終わって、みんなの感想を集めてみると、いっぱい意見を書いてくれて感激しました。中には、思わぬ質問が出てきて、またみんなが悩んでしまったりもしました。でも、その質問について話し合っている中で、やっぱり元の意見が正しいとか、新しく意見をとり入れたらしくて、もっと内容の濃い補充発表をすることができたと思います。

i としても、発表後に皆に書いてもらった感想シートを見てみると、おもしろい程に意見が分かれていて、改めて読んだ人の数だけ違った取り方があるんだなあと感じました。中には「今までずっと泣かされてきた母が、父の言葉を励みにがんばれるはずがない。」という、私たちの考えを根本から覆す意見もあり、本当に冷や汗かかされたことも。でも皆さんと根拠のあるしっかりした意見を書いてくれたので、なるべくその中からたくさんさんの考えを取り込むように努め、その結果、自分たちでも満足のいく、充実した補充発表ができたと思います。やはり、自分たちで一生懸命思索したことに対して、それに応えるように思ったことをぶつけてもらえるのはすごく嬉しかったです。

j 立場が変わって他のグルーブの発表を聴いて感じたこと。私の班は七番目で遅い方だったからというのもあるのですが、もうすぐ参考になるものばかりで、「よくもまあこんなに短時間でここまで……」と思わず溜息が出るものもありました。特に私が注目したのは、感想シートの欄にもあった「独創性」についてです。読んだ話をそのまま淡々と追っていかくだけなら、発表なんかする必要ないし、意味がありません。折角機会を得て分析するんだから、やはり文面からだけではわからない、奥の奥まで追求するべきだと私は思うのです。これについてよくできていてなあと思ったのは、二班さんの「卒業」です。話の中ではほとんど出てこなかった珠美たち家族の本音を、自分たちで想像し、それを実音声として再生するという発想には、本当に驚かされました。実音声というインパクトに加え、さらにその心の声の内容も的確で、感嘆させられました。また、最後の最後までもめていた「直美が父のスーツを着て卒業式にきた理由も」、まさに皆が納得できる結論であったと思います。そしてなにより、普通なら見逃してしまうような細かい所まで考えに入れることにより、平面であった話がどんどん立体的になっていくのを感じたのです。……って二班ベタ誉めですけど。私的には「話を立体的に感じる」一

てすごく重要なことだと思つたのです。角度を変えれば違う面が見えてくる。これは平面的ままでは不可能なことです。いつか読んだだけでこんな風に感じられるようになりたいと切に思います。

ii 生徒はどんなことを考えたか

生徒はこの授業を通してどんなことを感じ、考えたか。作品の言葉に導かれ、友人の言葉に喚起されて彼らが感じ、考えたことの実際を見ていきたいと思います。

k 卒業は家族の話だった。一回読んだだけではタダの珠美の卒業式の話だった。三回読むと所々に疑問を持ち始めた。五回読むと珠美以外の人間の気持ちに気付いた。何回も読むと一文一文の意味をもっと考えるべきだと思つた。読めば読む程深く、厚い話。父は一人で勝手に家出したけど、本当は深く傷つき父なりに家族の事を考えていたかもしれない。母は冷たい人のように見えるけど、本当の気持ちは家族の事を想う愛情であふれてるかもしれない。直美はおせっかいで理論人間のようだと思つてたけど、それは珠美の事を真剣に考え必死に家族を守ろうとしているのかもしれない。家族それぞれお互いに想い合い、でもすれ違つていく。けど父の家出や珠美の卒業式を通して自分の弱さに立ち向かうとした。父は新しい自分探しへ、母は家族のつながりを大切に、直美は自己表現、珠美は真剣に考えず甘えていた自分を捨てるため。家族それぞれが自分の弱さから卒業していった。机の上には辞書、線を引きすぎでぐちゃぐちゃだった。何度も壁にぶちあたり、その度に辞書をひき教科書に線を引き発表用紙を書き換えた。そして発表を終えた。そこには達成感があった。この学習は深く考え満足出来る物を作る事や人の気持ちを考える事で、人として成長し諦めず努力していくうちに自分の弱い

部分に立ち向かう、いわば私にとつても「卒業」となった。

l 今回この授業でグループ学習をしたことはけっこうプラスになったと思います。最初は何をしていたかわからなくて、なんでこんなさせるん？と文句を言っているだけでした。でも、私たちの発表日は早かったのでそんなこと言っている場合じゃなくなり、次第に焦つてきました。ほぼ毎日放課後の話し合いが始まりました。「卒業」を読めば読むほど、疑問が出てきてワケがわからなくなりました。四人で話し合っているときは、突発的に自分の思ったことを言い合つて、それについて盛り上がる、といった感じで進行していました。最初は、四人共不安で、ちょっと遠慮気味だったので意見もそんな出なかつたけど、だんだん活発になっていきました。話してはぶつかり、時間は止まり、また話し合う、の繰り返しでした。会話部分は空想だとか、失踪と家出の違いとか、それぞれの意見がやっぱりあつてよくもめました。私はこう思う、というのは簡単なので難しいです。もちろん自分の主張はしっかりすべきだし、もし個人発表ならそれが絶対必要です。でも、今回のようなグループ発表なら、全く同じ話を読んでも私とは全然違う考えをもっている……どうやったらそんなとらえかたができるんだろう……あつ、なるほど、ここを読むとそういうとらえ方も十分できるな、と一人では絶対気付かない点も、他の人の力で深く考えることもできます。実際そうでした。そんななかで私の考えなんて単純でくだらないから言わないでおこうという情けない時がありました(特に初めのほうで)。班員としての自分と、自分個人との両方でいろいろ悩み、聞きました。そして、いい発表ができたと思います。音声を使ったり、本読みしてもらったりと、資料だけでなく実際の発表にも工夫を凝らしました。

m 私は、「卒業」の発表をしてみてもこの家族は本当はすごい仲良し家族なんだけどちよつとした気持ちのすれ違いから、バラバラになつてしまつたと思う。この卒業という意味について、特に珠美に注目してみると、

いつまでも父の事を引きずり、前に進めなかった。将来の事もあいまいだったし。だからそういう部分の自分との別れを意味していると思う。でも卒業式に直美が父との思い出のグリーンのスーツを着ていった事については、今までの珠美からは卒業してほしいんだけど、やっぱり父のことは忘れないでほしいという気持ちがあったたんでないだろうか。卒業つていうのには別れと存続があると思う。嫌な部分とは別れ、大切な部分とは存続したらいいと思う。だから「卒業」にはそういった微妙な意味が含まれていたと思う。

作品の世界を「失踪」と「家出」とか、「別れ」と「存続」とかいう自分達の言葉でとらえなおそうとする試みがここには見られる。それはたとえ未熟な言葉であつたとしても、作品を自分の日常の世界に引き込もうとする心の動きであると言える。

n 三学期の授業では、自分で考えるという以外に他人と意見をかわすということがおおきな楽しみでした。普通の生活では、こんなに深く他の人の考えを理解しようとしたり、自分の気持ちをもとの言葉を使えば正確に近く表現できるのかを考えたりする事はとても少なく貴重な事だと思っています。自分一人で考えるだけでなく、相手に自分の意志を伝えるために言葉にしようとする事で新しい自分の考えを導き出せた事もあります。この授業を続けて、読んで考えるだけでは不十分、口に出したり言葉で表現する事や、他の意見を聞くことで、考えは何倍にも広がることを実感しました。

o 今回のこの発表で、初めて「ああ現国をやってるな」と思いました。少し大きさに言うようですが本当に生まれて初めて、教科書をこんなにみんな協力し、深く深く考え悩んだ気がします。はじめははつきり言っ

てなんだかやる気が出ませんでした。でも自分達の班がどの題を選んでやるかが決まって、それぞれ分担を決めているうちに、すごくいいものを作ろうという気がわいてきました。自分一人だけでなくて、班のみんなで意見を出し合い、それが討論になる時もありました。一人一人によってこんなにも考え方が違い、それを一つにまとめるのはすごく大変でした。でも、それとは反対にみんながたくさんの違った意見を出す中で、自分では想像もつかない角度から見た意見や、気付かないで見過ごしていた部分などが見えたことにすごくびっくりしました。そういった他の人の意見を自分の中に取り入れて、消化していくことで自分の想像力が広がり、鋭くなっていく気がしました。作者がいつた何を言おうとしているのか、それは作者にしか理解出来ないことなんだろうと思います。しかし本というのは自分で想像し、理解し、そこからいろんなモノを学ぶのだと思います。たとえ作者が言いたかったことと違つても、自分流にどう理解し、どれだけ読みとるかが問題だと思います。今回「断層」を読んで私達は「大人への階段」というテーマにたどりつきました。この短いテーマに透の葛藤、そして私達自身の葛藤がつまっています。

p 主人公と同じ時を生きているからこそ、分かる気持ちがある。大人になつてしまえば理解出来ない思いも、今だつたら感じる事ができる。このように思いながら話し合ううちに、みんなにも私達の考えを伝えたいと思うようになった。伝えるという行為を通じて、言葉を選び考えを整理することの大切さを知った。試行錯誤しながらではあるが、発表・補充で私の考えは伝える事ができたと思う。また一つの話を持ち下げた事によって、「考えよう」とするアンテナが伸び他の三小説をヒントによって一つ一つの話に対して自分なりに考えを持つ事ができたと思う。これは小説に関わらず日常の小さな一面にもあてはまると思う。一つの物事に対して感じ考える事の重要性を教えてくれた授業だった。そして

伝える事の難しさで、「考え」に終点はない事を私に気付かせてくれたと思う。考えないで過ごす方が楽かもしれない。しかし考える事を止めて生きることはできない。この授業を通して、今、私はこう考える。

9 今回、現国の授業をして、私は本当に良かったと思う。七班はすごい班だった。「三つの小説を読んで、共通しているところを発表しよう」ときめて、みんなで考えいこううちにやっとなら、私達がしている事は、すごく難しいことなのだわかった。小説に文字にして書かれていることだけを見ると、「主人公が高校生」ぐらいしかかかれていなかったから。一つの言葉に注目しては意見をぶつけ合い、疑問を持ち、あたまたをガンガンさせながら考えた。途中で「もう、こうしとこう」という風には全然ならなかった。班の人は、みんな自分の意見をしっかりと持っていて、それを言葉にできる人たちだった。だから、私が絶対的に自信を持って言った意見が否定され、その理由に思わず納得してしまうことも多かった。私達は真正面から意見をぶつけ合うなかで、自分の中にある固定観念や狭い視野に気づき、新しい考えも受け入れられるようになっていった。そうしているうちに二週間が過ぎ、発表となった。発表が終わると一段落……かと思えばそれは新しい「始まり」だった。みんなからの意見の中には、今まで気づかなかったことがたくさんあった。私は現国の授業を通していろんなことを考えた。ひとはみんな違うけれど、違うからこそいいのだと、違うからこそそこからいろんなことが生まれるのだとわかった。また、この授業が私に「他人と意見をぶつけ合う」ことの素晴らしさをおしえてくれた。

「今回やった授業について私はとてもよかったですと思います。最初こんな授業をやるって聞いたときは、「めっちゃダライ」「授業ちゃうやん」って正直思いました。とにかくやりたくないって思いました。でも授業中にみんなで集まって、自分の意見や他人の意見を言い合ったりするのが楽しかった。なんか違う考えもあるんやあって感じ。中学の時なんて、

こんな授業やった事ないからすごい新鮮やった。私ら五班はとにかくいろんな意見を言い合った。その意見一つ一つにも納得したり、反論したり。うちの班は原稿書くのに時間かかった。上手くまとめられなくて、最後までひきずってた。この発表でまず一つ目いい事は他人の意見を聞けること。他人の意見を聞くことで考えさせられ、それで又自分も意見をだす。自分の意見をしっかりと言えない子もこの授業でいえるようになりそう。あと他の班の意見を聞ける事。同じ小説で班によってまったく考えが違うのにはビックリした。同じ小説について二つの班だけじゃなく三つぐらいにしてもいいかも。

生徒は友人の言葉に喚起され、考えようとしている自分に気づき、驚いているように見える。時間をかけて一つのことについて話し合うというほど初めの経験は、自分達の場を自分達がつくり、自信を得ていくという道筋をその未来に持っているように思う。

iii 作品から日常は見えたか

三つの作品を班での話し合いを通してクラスで読み進み、生徒は自分達の日常をそこに重ねただろうか。生徒は、こう書いている。

s これらの短い小説で発表するのは難し過ぎる。初め、私はこのように思っていた。しかし今授業を終え振り返ってみて、この授業が私に与えてくれたものが分かる気がする。小説が短いのは私に考えるスペースを与えたのだと思う。一つの話の深く掘り下げていくうちに、著者が伝えたい事が見えてきた。班を進めていく中で、意見がぶつかったりもしたが、ぶつかる事でもっと深い考えが生まれたり、自分の持っていた

考えが研ぎ澄まされ一つの考えを全員で共有できるようになったと思つた。空白だったスペースに著者のかわりに私たちなりの考えがどンドン詰まっていた。

↑ 私たちはすごい。私を含めていいのか解らないけれど、この勉強を振り返つてそう思う。一つの小説を学ぶのに、放課後の時間を使い、朝早く集まり、テスト前なのに休みをつぶして話し合う。頑張った。

「これが高校生っていうものですよ。」という先生の言葉に少し「？」となりながらも、この授業をやりとげた私達はすごい。私ははじめ、こんな授業になるとは思っていなかった。中学校までではこんな事やつたことがなかったし、きつと普通科の学校では、他の先生ではやることは少ないと思う。私たちの発表の中で、「私たちは日頃、友人のささいな言葉やいろいろなものから何かを感じて……」みたいな話が出ていた。これは、感じとろうとしなくても感じれることだけれど、小説を学ぶことで、一生懸命に主人公の心情や作者の伝えたいを感じとろうとした。こつちのほうもまた、心に残ることだと思つた。私は高校生で、思春期で、まわりからいろいろなことを感じとっている。でもこんな時期だからこそ、自分から感じとろうとすることも大切がなあと思つた。

↓ これらの授業を通して、私はわたしとそれぞれの話の主人公をかぶらせた。この時私が珠美なら、透なら……と。そして一番共感できたのが、断層らの、「大人と子供の違い」です。大人と子供の違いは曖昧ですが、断層らの方が、大人と子供の違いは大きい。

珠美も、透も、そして私も、いずれ大人になります。珠美の父と透の父も、昔は子供だったのと同じで、私たちは大人になり、そして「子供のくせに」こつこつ言葉を発表するようになります。……断層とは、その境目のこつこつないだろうか？卒業とは、そのきつかけのことじゃないだろうか？目に見えない大人と子供の差、それはきつと人それぞれ違つた時期に訪れてきます。だからこれらの小説は、珠美ならこつこつ、透ならこつこつ、

と、一人一人の経験といつた形でつづつていった感じなんだと思います。今回の授業では、先にも出した通り、自分と重ねてみる……それが一番やらなきゃいけない事だつたんじゃないかな……。僕ならこつこつ、私ならこつこつと思春期の自分たちとかぶらせて、初めて得られるものを見つける事が必要だつたんじゃないかな……。そして自分なりに「卒業」やら「途中下車」やら「断層」をみつけなきゃ駄目なんじゃないかな……。と私は思うのです。

↓ 考えること。私はこの授業で今まで生きてきた中で一番、といつてもいいくらいたくさん事を考えさせられました。

「明るい雨空」を読み、感じ取り、考えることによって、私は自分なりに成長出来たと思つています。

私は自分の思考回路に迷わされて、そして追い回されているような気分でした。発表が終わつた今でも、「削り取れないもの」について知らず知らずのうちに考えてしまつています。でもそれでいいのだと思います。この作品について考えることによって、この世の中で、人生、自分の成長、「心」といつた、すごくスケールの大きな所まで、私は考えを巡らしました。だから、発表が終わつたからと言つてここまで考えてきたことが消えるわけがありません。というより消せるわけがありません。そう思うと、私のこの三学期の現国の授業も「削り取れないもの」の一つなのかもしれません。

自分の発表だけでなく、すべての発表を通して、私は何よりも「成長」ということを考えさせられました。どの作品にも、この成長というキーワードが組み込まれていたと思います。主人公の成長を読者が感じ取つて、読者もまた成長し、そして作者もまた本を出すことで成長していつているのではないだろうか。人の心の面での成長は止めてはいけないのです。日常のささいなことに対して何かを感じ取り、周りの人の気持ちを考えることによって常に「自分」を作り上げていくことが必要で

す。そういうた物事を純粹に感じ取る心、というものは一生失つてはいけません。私もこれから、削るべき部分、削られない部分を探し、自分を見つけていきたいです。

W 人は生きていくうちにそれぞれ問題にぶつかる、その問題と向かい合う、そこに自分が成長するきっかけ(大切なもの)がある。その問題と人が真剣に取り組めばきつと大切なものは得れるはず。その問題にぶつからない人、真剣に取り組まなかった人は大切なものは得られない。得る人と得られない人がいる。

X ばくが現文の三学期の授業で得た最大のものは、人の意見に対して自分の考えを持つ事が出来るようになったこと。又、それを文章に表すことができる力が飛躍的に向上したことです。これまでも産社の授業などで、人の話は多く聞いて来たにも関わらず、自分の意見といえは「よかった」「おもしろかった」：とかだけ。でも今は違う。何故?に変化が起りました時期に生活面で大きい出来事はありません。となるとすると現文の発表しかないということになります。普通の授業だと常に教えてもらっているという要素が強いのですが、発表となると立場が逆転してしまふ。自分達が考える必要があります。自分で考えたから、ひとの意見に対して、その人が考えたとときの苦労したいなものが解つて、人の意見に対する意見がでてきたのではないかと思います。

Y 一番初めに私が言う番で感じたことをそのまま言ってみたら班の子に「おお。そういう考えもあるんか。」といわれ、私は班の役に立てた喜びと同時に国語が少しわかった様に思いました。私つてなんて想像力がないんだろうと思つていた原因は、他人とのとらえ方考え方の違いを想像力の大小だと考えていたのだと思います。人は十人十色、みんな考え方は違うんだと思ひました。

Z 「考える」つていう事は、人間からなくなる事はないと思ひます。絶えず私達は考える事をしています。でも、それを深く掘り下げる事つて、

不思議なことにあまりありません。漠然としてしか、物を考えません。忙しすぎて、面倒くさいのかな?今の世の中、効率がいいつてことが重視されて一旦物考え出すと止まらなくなるから、考える事つて、日常は出来ないのかもしれない。でも人生には、絶対何かを考えなきゃいけない時があると思ひます。この授業は「考える」ことの大切さを私達に「考えて」ほしかったのかなあ?と感じました。そして、皆の色々な考えに触れて、さらにそれを「考える」というのが、これから生きていく上で、また、グローバルな視点をもつ上で、それを伝えていく力も、とても重要なんだと思ひました。今回の授業はすごく有意義でした。私も、もつと色々考えて他人にそれを積極的に伝えて、伝えあつていきたいです。

三 「地つづき」の問題と

私達がつくつていく場所(展望にかえて)

新一年生に対してせめて彼らがつ持っている日常の課題を意識させようと、なかば破れかぶれな気持ちから彼らを中心に据えた授業を私は展開した。そして三学期全部を彼らのありように添つて考えながら過つて来た。ドラマは放課後、各教室で繰り広げられる。全員が残りの議論の声が廊下まで聞こえてくる班がある。一方では、二人しか残つていない班がある。その二人も別々の場所で分担をこなしているのである。Q&Aの時、班の様子は一目瞭然である。高校一年は若く、正直である。自分達が納得した話し合いをしている班は、私にもつと質問しろとせがむ。あるいは、なぜあの大事な質問をしないのかとせめる。発表の後は、感想表の書き直しを生徒同士でさせたりするのである。自分達で獲得したものの大きさを

あらためて私に感じさせた。欠席が続く班員を抱える班、何度も分裂の危機だった班、発表の五分前に資料が完成した班など、さまざまありようを各班は示して来た。私は、そのありように応えて何度も資料を突き返したり、発表させずに緊張した場面をつくったり、最大級に評価したりしたつもりである。

「卒業」「途中下車」「断層」。三つの作品は作者も違い、何の関連もない。しかし複数で読み進むことで、それぞれの作品の中に「卒業」「途中下車」「断層」を見つけようとしたこと、さらに自分達の日常に「卒業」「途中下車」「断層」があると感じ、考えようとしたことは、彼らの懸命な取り組みが到達させた場所であると言えるだろう。そこでは、私の授業の構想は否定されているように思える。日常の課題解決に資する授業などはない。日常の課題が意識され話し合われる時、ちょうどその時に課題は解決へ向けて動き始めていくのだ、というように。

私が生徒に導かれて授業を「地つづき」のものとしようとしたこと。それは私達の問題を現代の問題のあらわれの一つとしてとらえなおしたいと考えたということなのだろう。現代の問題は解決されず、依然としてあるままである。そして生徒は、その課題と向き合うことだけが未来への展望であることを教えてくれるのである。

この六月に、オープンスクールが行われた。本校を中三生やその保護者に広く紹介する行事で、その中に体験授業の企画がある。私の授業が契機になり、有志四人が「絵本から学ぶ現代文」と題して生徒として初めて他の教員と同じように授業することになった。

(資料④) 授業を終え、彼らは書いている。

小説を考える。人それぞれの意見がある。「これは違う」なんて言ってる意見の否定すれば「なんで？どこが？」と返ってくる。(どこが誤っているんだろ…)。考えて、なぜ誤っているのかきちんと答えられなかったり…。そこで再び必死に考える。そうしてみんなの意見は強くなっていく。同じ言葉で一つのことをあらわしても、考えたあと、苦悩したあとでは言葉の「重み」が全然違う。そんな「重み」をみんなが発見したとき、がんばってよかったなあ、と今までのつらさなんてバアーッと吹っ飛ばしてしまう。そして何よりも、みんなで見えなかつたことがみんなを知ること、自分を知ることにもつながった。研究発表の準備中、みんなといっしょにいた時間に、それほど長いとも言えない時間、でもずうっと一緒にいたみたい。に前よりもずうっとみんなのことがわかるようになった。自分のことなのに今まで見えなかつたことがたくさん見えるようになった。こんな風に見えるが、自分が見えてくる。今まで生きてきて、こういう風に人と自分と接する、そんなことはほとんどなかった。もしかしたら、初めてかもしれない。だからいくら辛くても、考えることをやめようなんて思わなかった。(今考えてみると、「重み」を発見したときあんなにもうれしかったのは、現国の発表の準備が進んだからじゃなく、みんなのこと、自分のこと、今まで見えなかつたことがバアーッと自分の中で見え、みんなの中でも見えたからじゃないかなと思う。) 体験授業をしてみてもいいと思ったのも、前回の授業で触れたもの(最近の私の生活ではなかなか触れることのできないもの)をもう一度、前よりももっと触れてみたかったからだと思う。案の定、前回よりも心身の苦しみは大きかった。しかし誰一人としてその苦しみから逃げ出さなかつた。

自分から進んで複数の人間の中に身を置き、「言葉の重み」を経験していききたいという志向がここにはある。それは、「逃げ出さず」に言葉を通して課題と向きあう態度であると認められる。

ii 内容には自信があった。ただ、内容の把握の仕方が全員一致したものであったかは疑わしかった。プリントを書いた私も、細かいニュアンスが皆と一致しているか自信がなかった。その辺りも、皆が同じことを繰り返すという事態を招いた一因だと思ふ。

その点から考えて、今回の発表には大いに反省すべきところがあった。内容がどんなに良くて、それを伝える力がないといけないということがよくわかった。前回は皆が内容を知っている分、勢いでもっていった部分というか、うまく説明できなくても通じた。今回もその勢いで話をしたが、感想からも「少しわかりづらい面があった。」と指摘された。(というか、他の部分を理解してくれたのがすごいと思った。) 次の課題(次があるのか?)は、そこだなあと思った。

結果として、私は今回の発表には全然納得がいけない。内容が良かったからなおさらである。内容を伝えきることのできた発表だとは全く思えない。くやしい。環境が変わるところも違うものなのか。今回はそういうことも含めて、いい勉強になったと思ふ。だが、私は勉強になっけていても、中三生ははたしてそうだったかと言われると、とても辛いものがある。だから納得がいけない。またくやしさとというのは、中三生に悪いという気持ちと、私に対してである。あれだけ頑張つて、自分達がぶつつけ合つてつくりあげたものを、自分で壊した(と言うと大げさだが)からである。リベンジしたい!

複数の人間がつくりあげていこうとすることは、何者にも守られていない場所に進むことであり、困難を初めて経験することでもある。時には壊すことになるということ。それも、つくることなのである。友人と獲得したことばの力への信頼が、「リベンジしたい!」という向きあう気持ちの持続を生むのである。

「総合」という言葉がある。国語の授業は、生徒の日常での総合をことばの力にかかわつて展望したとき、初めて成立するように見える。ことばに追いつき、ことばを獲得したとき、人はもうそのことばによつて生き、状況を変えている。ことばの力は、場面にある。日常と授業を「地つづき」のものにし続ける運動の中で私達が少しでも場所を壊し、つくつていける可能性があるとすれば、ともに自分達が立っている場所を確かめあいながら相手の言葉を自分達の方角を示してくれる新鮮な断片として静かに聞き、とらえなおしていくことの重なりの中にしかないように現在の私には思える。

(大阪府立今宮高等学校)

